

注解『七十一番職人歌合』稿(十九)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第四十一番および第四十二番の注解を収めた。

四十一番 すあひ 蔵回

〔職人尽〕

〔訓蒙凶彙〕 牙婆がば 今按すあひ。女僧同。ぎやくわい 〔銀葉夷歌集〕 古手屋なりければ めで竹の茶笥をとりて大ふくをけさふるてやと祝ふ屋の内〈正治〉 〔人倫訓蒙凶彙〕 古手屋 絹布木綿等、足袋帯にいたるまで、古着、質の流れ等を買集めて、これを商ふ。烏丸通二条下ル丁、五条通室町の西、所々にあり。 道具屋 一切の古道具買取りてこれを商ふ。大見世を道具屋と称じて、小見世を古金棚と称ず。一条の西堀川、四条の下押小路、藪下等にあり。 〔俳諧職人尽〕 すあひ 蔵廻り 秋の日やすあひ暮れ行く烏丸〈随意〉 鹿馴るるさらしすあひや塗り足駄〈佳節〉 鞆の戯れとや見ん布袋 〈路道〉 水鳥の顔静かなる牙婆かな〈寥和〉 淋しみを押し売りする敷かんこ鳥〈活麿〉 蔵まはり年の鐺や払ひ物〈寥和〉 〔江戸職人歌合〕 八番右 古着屋 土手に生ふる柳の葉散りそめてたなの板間を月ぞ洩り来る 左右共申「感心之由」。

判云、……右は、柳原の木の間より初秋の月の洩り来たりけん、又、あはれ不_レ浅。左右ともよろしきにとりて、右は、姿だけ高く、未までとほりてたわむ所なし。……右、勝つべし。つじつまのあはで月日をふる袷うらとけたりと何頼みけん……左申云、初句、あまりに俗なり。判云、……右哥の初句、かやうの事、此の歌合の常也。うらとけたりと何おもひけんなど、あしうやは侍る。左の夜具、尺足らぬにつきて、右為_レ勝。「宝船桂帆柱」古着屋 正直の頭を神の守りにて千早ふる着の店の繁盛「そんで二十だ。ああ、安いもんだ」／古道具屋 長生きの賀らくた道具並べつ千とせふるものひさぐめでたさ「ぼろ三_三五_三ふんが元値の買いだ」〔難波職人歌合〕下三番 古手屋・道具屋 つるばみの馴れ衣のみ手に触れて新桑まゆにえにしな身や 右の方人云、馴れ衣のみ手に触れむ事、古手商ひにはさも有るべけれど、つるばみ色には限るべからず。又、伊勢物語に、新桑眉のきぬはよけれど、これはきぬといはざれば、いかがなり。左方答、橡ぞめは色黒くして花やかならねば、万葉集に、つるばみの馴れぬるきぬと云ひて、是をふりたる女にもたとへたり。又、此の歌、上に衣あれば、下のきぬは略きたるにこそあれ。よき人をよしてふことはいささめに見てもたがへむものにあらなくに 左のかたうど云、此の作者、目ききに練じたるを誇れるのみにて、恋の歌とも聞こえず。万葉集にいはゆる、心のよるべなきものとかいひまし。右方答、よき人をよしと見そめたるは、則ち恋に有らずして何ぞや。判に云、左の歌、にぎたへをにぎてともいふごとく、古手は則ち古たへなれば、新らしきにえにしなきを歎かれたる心、全く万葉集の、くれなゐは移ろひ安しつるばみの馴れぬるきぬにあにしかめやも、と詠みたるとは裏うへにて、いとあだめきたる歌といふべし。右の歌、目ぎとく見そめられたるよしは聞こえざるにあらねど、惣てのおもむきのおくれて聞こゆれば、猶、左に勝を譲るべし。

【本文】

四十一番

月のきる雲のころもをうりものや

さふらふといふ人もかはめや

ころも―〔類〕衣 　うりもの―〔類〕うり物

くらまはりたゝいたつらにくるゝ戸の
あけぬ夜ふかき月をみるかな

左右ともに、させる難なし。可為持。

思ふ事ひとつたふるみちならて

およふやあるといふはよしなし

こひ衣そてをかへはやくらまはり

たえずなみたのなかれものとて

左は、よその人の詠哥ならば、尤さもとき

こゆ。作者の身にて、哥の心たかふへし。右、

袖をかへはや、なかれ物、さもときこゆれと、

これも、そてをかへはやといふ、いかゝ。袖をかへよ

など詠へきにや。とり合て、為持。

◇

◇

御よふや

さふらふ。

蔵まはり

御つかひ物、く。



くらまはり―〔類〕蔵まはり
ふかき―〔類〕深き かな―〔類〕哉

事―〔類〕こと ひとつたふるみち―〔類〕人に伝ふる道

およふやある―〔類〕おようや有

こひ衣―〔類〕恋衣 そて―〔類〕袖 くらまはり―〔類〕蔵まはり

たえずなみたのなかれもの―〔類〕絶す涙のなかれ物

きこゆ―〔類〕聞ゆ

哥の心―〔類〕歌の意

きこゆれと―〔類〕聞ゆれと

これ―〔類〕是 そて―〔類〕袖

とり合て―〔類〕取合て

〔忠〕^{四十二番}すあひ〔明〕〔類〕すあひ

御よふ―〔明〕〔類〕御よう

【語注】

◎すあひは、語源、仮名遣い未詳。「すわい」とも発音されたようで、『日葡辞書』に「Sunai」、堯空本節用集に「贖^{スワイ}」とある。「牙僧」、「牙婆」などの字を宛てる。売買の仲介をして利を取る者。室町末期ごろから起こった職種で、主として女性が携わっていたらしい。具体的には、公卿、門跡、大名家を始め、町の隅々までを回り、小袖、帷子等の古着類や、櫛、扇等の装身具などを買い取り、それを転売したり、交換に応じたりしていたようである。一方、売春にも関わっていたようで、それらの様子は、奈良絵本『おようのあま』に詳しく描かれている。『おようのあま』には、「すあひ」という言葉は見られないが、ここに登場する御用の尼は、「何も召さるべき物やおはします」、「何にても召され候ふべき御用あらば、取り替へてまいらせん」などと言って客を訪れており、これは、すあひが「御用やさふらふ」と客に呼び掛けていることと符合する。また、近世の例であるが、『心中恋の塊り』に、「都にはすはい女とて、冬は着る物の表、夏は帷子を、大なる文庫に入れ、花色染めの太袋に入れ、下女に載かせ、其の身は御所風の髪、玳瑁の笄に蒔絵の挿櫛、下には衣物、上には紺染めの木綿着り物に、紫縮緬の金剛を履き、室町烏丸の間屋問屋をありきて商ひをする」とある。『尤双紙』下には、「いつはる物のしなく」の頃に、博奕打などと並んで、「物売るにすあひといふ物」とあり、いかがわしい商人と考えられていたようである。

蔵回は、蔵（質屋）を回って質流れの品を買い取り、それを転売する商人であったらしい。『嬉遊笑覧』十一は「何にまれ調度を買まはるものとみゆ」とするが、本職人歌合の恋の歌には衣が詠み込まれ、絵には刀が描かれている。「蔵回」という職名は、本職人歌合以前の資料ではまったく、以降の資料でもほとんど管見に入らず、したがって、蔵回は、室町末期ごろに起こり、以降は「古手買」、「古着屋」、「道具屋」などと呼ばれる商人へと発展して行ったのではないかと思われる。

◎月のきる雲のころも 「雲の衣」は、雲を衣に見立てた言葉。「山の端に雲の衣を脱ぎ捨ててひとりも月のたちのぼるかな〈俊頼〉」（金葉集三、秋部）などの例がある。「月の着る雲の衣」で、月が雲に隠れていることをいう。

◎うりものや 「や」は詠歎の助詞か。疑問の助詞と見て、下句「さふらふ」に続くこと取ることもできる。

◎さふらふといふ人もかはめや 「さふらふ」は、「さうらう(sōro)」と読むのであろう(「御ふやさふらふ」の項参照)。「さふらふといふ人」は、前項の「や」が詠歎の助詞とすれば、すあひが「御用やさふらふ」と呼び掛けるのに対して「さふらふ」と答える人、すなわち客のことか。『新大系』は、「や」を疑問の助詞と見て、「『売り物がございますか』といふ人(牙僧)」とする。これは、すあひが古着などを仕入れる場面を想定している。「めや」は、推量または意志を反語的に表す言葉で、(月の着る衣などを)買うはずがあろうか、の意。月の衣など誰も買い手がつかないので、(月がいつまでも雲に隠れていて)残念だ、というのであろう。

◎たゝいたつらにくるゝ戸の 「いたづらに暮る」から「樞戸」と続ける。「いたづらに暮る」は、ここでは、商いの成果のないまま一日が暮れる、の意。「樞戸」は、扉の一端の上下にある突出部を鴨居と敷居にある穴に差し込んで扉が回転するようにした戸。「葺」の縁語。「……樞戸の」で、序詞的に下句に続く。

◎あけぬ夜ふかき 「樞戸の開けぬ」から「明けぬ夜」と続ける。「夜深し」は、夜明けまでにまだ時間のあること。玉葉集に、「入り方の月は少なき柴の戸に明けぬ夜深き風をぞ聞く(教良女)」(十六、雑歌三)と、ここに似た表現の歌がある。

◎思ふ事ひとつたふるみちならて 恋の思いを相手に伝えるためというわけでもなくて。

◎およふやあるといふはよしなし 画中の言葉にあるように、すあひは実際には、「御用やさふらふ」(御用がございませうか)と言って注文を取ったのであろうが、「御用やある」は、それを和歌らしく言い換えた表現。(恋の思いを伝えるためでもなく、)いつも「御用やある」と尋ね歩いているのは甲斐もないことだ、というのである。

◎こひ衣 心を離れない恋の思いを、いつも身につけている衣にたとえた言葉。また、恋をしている人の着る衣。「恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なしあが恋ふらくは」(万葉集十二、寄物陳思)、「恋衣いかに染めける色なれば思へばやがてうつる心ぞ(俊成)」(続拾遺集十一、恋歌一)などの例がある。

◎そてをかへはや 恋衣がいつも涙に濡れているので、袖を替えたいというのである。そのことに、質流れの着物の袖を付け替えよう、の意を掛ける。判詞では、これについて、「袖を替へばやといふ、いかゞ。袖を替へよなど詠べ

きにや」と批判するが、それは、「袖」を客の着ている着物の袖と取ったからであろう。しかし、歌の結句に「流れ物」とあることからすれば、この解は不自然である。

◎たえずなみたのなかれものとして「たえず涙の流れ」から「流れ物」と続く。「流れ物」は、質流れの品物。近世以降の用例しか管見に入らぬが、中世に、「若、このやく月をはせすぎば、なぐれ質たるべき上者、徳政のさたにをよぶべからず」（建武式目追加、永正十七・二・十二）、「教豊卿御代、質物二入、流之処二」（言国卿記、文明十・九・十四）などの例がある。なお、三十六番左、いたかの恋の歌に、「はては涙の流灌頂」と、似た表現があった。

◎よその人の詠哥ならば、尤さもときこゆ。作者の身にて、哥の心たかふへし 第三者がすあひのことを詠んだのであれば、納得できるが、すあひ自身が詠んだ歌としては、内容がしっくりしない、というのである。「よしなし」と断定する語調が他人ごとのようで、恋をする当人の歌としてはふさわしくない、との判断から言うのであろう。

◎そてをかへはやといふ、いか。袖をかへよなと詠へきにや 作者である蔵回の立場からすれば、「袖を替へばや」ではなく、「袖を替へよ」などと詠むべきだ、というのであるが、この批判は当たらない（「そてをかへはや」の項参照）。

◎とり合て、為持 「とり合て」を、『新大系』は「とりあひて」と読むが、「とりあはせて」と読むべきであろう。「取り合はす」は、比較すること。本職人歌合では、他に、六十番（薰物売・葉売）の恋の歌の判詞、「此番、さしても聞えず。薰物も葉も、取り合て、為持」、七十一番（酢造・心太売）の恋の歌の判詞、「左哥は、……艶に聞こゆ。右は、下句よろし。取り合て、持にて侍べし」の例があり、いずれも、左右の歌を比較した結果、優劣のない場合に用いているから、歌合判詞にしばしば用いられる。「準へて持となす」（十九番語注「なすらへて為持」の項参照）の「準ふ」と同じニュアンスを持つものと思われる。ただし、歌合判詞で、「取り合はす」という語を、このような文脈で用いた例はない。

◎御よふやさふらふ 底本、尊経閣本、白石本は、職名「すあひ」を落とす。「御用がございますか」の意で、すあひが客に呼びかける常套句であったのであろう。「さふらふ」は、この時代では、「さうらふ」(sōru)と言ったと思

われる。ただし、中世末の女性の書き言葉には、より古い「さぶらふ」という形が残っており（ロドリゲス日本大文典）、（こ）は書き言葉ではないが、すあひの常套句であつたらしいことを考慮すれば、「さぶらふ」であつたかも知れない。明暦板本には、「さぶらふ」と濁点を振る。

◎御つかひ物、く「使ひ物」は、使つて役にたつ物、徳用品の意か。『日葡辞書』に、「*ucaimono*、使用する物、または、役にたてる物」とある。「御使ひ物、御使ひ物」は、蔵回が客に呼びかける常套句であつたのであろう。

【絵】

すあひは、二人とも、白い衣を被いた上から市女笠を被り、小袖を着、草履を履く。向かつて左の一人は袋を背負い、右の一人は右手を差し出して、蔵回到話にかけている様子。

蔵回は、烏帽子、直垂、袴姿で、袴の裾をからげ、草履を履く。左手で大きな袋を背負い、右手に大小の刀二本を持つ。この刀も売り物であろう。類従本は、直垂の紐を描き落とす。

【参考】

○ある時、年寄りたる尼の、袋を頂き立ち寄り、何も召さるべき物やおはします。召し御ならしの御小袖、古き御中、召し替への御衣、御肌付けの古帷子、洗ひ晒しの御ひへ物、御頭巾の布切れ、首周の切れ端、御手拭てぬぐいの切りはづし、何にても召され候べき御用あらば、取り替へて参らせんとて、縁に腰うち掛けて、袋そばにさし置きて、苦しやとて、休みいたり。

（『おようのあま』）

【職人尽】

〔古今夷曲集〕筏士 芳野川滝とびくちをあまたもて手わうざわうに下す筏士〔重故〕〔後撰夷曲集〕寄櫛恋 二十六度くどけどとけず黒髪のくしくし物を思ふ身ぞうき〔利房〕〔銀葉夷歌集〕寄櫛恋 下紐も初めて人にとぎくしのはもじに思ふけさの衣々〔方碩〕／ 乱れ箱と櫛と人の方へやる人にかはりて 書き添へし櫛のはもじな言の葉を思へ心の乱れ箱とも〔顕行〕〔大団〕寄筏恋 我が恋は筏を繋ぐくされ縄逢ふ瀬となれば切る御縁か／ 櫛をくるとて 此の櫛を万代さして祝ふなり君が黒髪とけた中には〔人倫訓蒙図彙〕筏師 奥山より伐り下して川水に浮かぶるを、組み合はせてこれに乗り、竿さし下すを筏師といふ也。都鄙にこれ有る中にも、嵯峨の大井川の筏、歌に詠めり。／ 櫛挽 神代の昔、稲田姫に其の親手摩乳が、櫛をもて髪揚げして、姫を素盞馬に奉りしとかや。然れば、始まり久しき事也。又、妻櫛とは、化生の恐るる櫛と也。櫛を投ぐるは、大きに忌む事とかや。櫛は、伊須、黄楊等、其の外語の唐木、象牙、玳瑁等をもつて造り、蒔絵、金具をもつて彩る。各下細工人有り。唐櫛は唐より渡す。其の外、大坂長町にて造る。又、梗櫛、是を商ふ也。細工人別にあつて、此の所急売るなり。竹、角、象牙、鯨の鱗をもつて造る。京櫛挽、寺町通押小路の下舟、木長門、其の外所々にあり。伊須の木、長門より出づ。此の木を舟木と号す。〔用明天王職人鑑 職人尽〕ひくや夕なの梳櫛や、乱れ鬢櫛人はよも、水櫛とこそ思ひしに、誰が三ツ櫛に名を立てて……〔狂歌活玉集〕社頭櫛 絵馬にして掛け奉る五の字櫛神もすくとのつげにまかせて〔友房〕〔誹諧職人尽〕筏士 櫛ひき 筏士の裸を安き角力かな〔不卜〕いかだしの笠美しき桜哉〔嵐水〕あの男筏に寝るか夕千鳥〔山夕〕筏士の寝姿見ゆる螢かな〔長流舎 呉江〕筏士の鴨の中ゆく寒さかな〔蛙井〕筏士の涼しかるらむ柳陰〔珠龍〕筏士や陸は手ぶりの旅衣〔遙吟〕筏士のそこりになりし寒さかな〔夜白〕筏士の櫛に幾夜の衝哉〔松巴〕筏士や霜に目をする水鏡〔万夫〕筏士の枕に近き氷かな〔伴路〕

いかだしや今日の雪解を懐手〈万尺〉 いかだしも布顛を掛けたる寒さかな〈上州桐生 喜考〉 藻の華を鍋にも汲むや筏
乗り〈楼舞〉 筏士の一夜を蘆の花の陰〈銀砂〉 筏士のいてつけらるる霜夜哉〈聞明〉 筏士の跡追ふて降るや花の雪
〈咫堂〉 すがすがし筏の上に松飾り〈寥和〉 十三夜女の買人後の月〈佳節〉 櫛挽の笑ふや鳴のそそげ髪〈東風〉 手心
に啼くや櫛屋のきりぎりす〈田女〉 あつらへの櫛もそよぐや夏柳〈寥和〉 「今様職人尽百人一首」 櫛挽 きりぎりすひ
くや亭主の泣かせ売り黄楊の三櫛人も買ふなん 「旦那、まぶなけんだのもし」 「いや、此の黄楊にしませう」 「職人尽発
句合」 五十八番右 櫛挽 明けやすき夜や櫛の歯の隙間なし 夏の夜のせはしさを櫛の歯に掛けたることはりに、鶏も鳴
き鐘も鳴りて、やるせなききぬぎぬの別れも籠もるべし。されば、遺愛寺の鐘に枕を敬てしも、わりなき思ひのありしや、
知らず。「お六櫛は当世のはやり物」 「職人尽狂歌合」 左 筏士 峰雪を筏に積みてさゆる日は顔までさをになしてわな
なく 左、大方幽玄にて、優に聞こえて侍る。わきてさをにといふ詞こそ、めづらしく、興は侍れ。……左勝ちて侍り。
「あからめもせで竿さしてあるを侍て。こと問はんとは、あな心な。水上の岑の嵐、いかに吹くかしり候はず。」
左 筏士 右 同 組みおきし筏は雪に埋もれて棹やしるしの棹と見ゆらん 下すべき筏埋むを幸ひと雪の白木に手も組
んで見る 左、棹やしるしのなど利口し申されし、心にきき筏師と知らる。右、結句ひとふしあり。されど、左の筏、い
みじき良材と□ゆめれば、運びにはこれをこそ取り用ひ侍るべけれ。 右 筏師 降る日には棹も寝ころぶ枕かのこ
がでや雪を愛づる筏士……右、棹の横たはれるより、枕詞のこがをしも取り出で申されし、言ひ知らずたくみに寛ゆ。此
の作者、ざれ歌にとりてはゆゆしき道の博士なるべし。 左 筏士 降る雪の深さを問はば筏士も棹さし入れていか
が答へん 左、筏士の棹、させる難も侍らず。……左右あまりの相違も侍らねば、持と定めつ。 左 筏士 冬春の
景色を割りしくれ筏雪を花とや組み合はせ見ん 左右ともに、題によくかなひて侍れば、持と申すべくや。「今様職人尽
歌合」 櫛挽 なりはひは櫛の歯を挽く我ながら返事待つには人もやられず 左は、櫛の歯を挽く身ながらも、忍ぶ使ひは
心のままならずと嘆くさま、四つ辻に立ちて櫛占などや引きつらむと、あはれに覚えて、心も引かれ侍れど、右は……請
け合うて勝とす。かたはらより誰か差し水のあるべき。「鶴が岡なる尼公の御遺物写せと仰せらるる」 挽く櫛のは
かばかしくは売れかねてさてもびんなき世を嘆くかな 左、梳櫛のすきと売れざるはびんなく、右、……勝つべきにや。

／ 急がれて今宵もひくや望月の小間物屋から逃への櫛 八月十五日迄と日を限りて逃への櫛、格別に念入れてよく出来たり。…… 花咲くとつげの小櫛の山里の使ひは来たり齒を挽くがごと 柘の小櫛の山里と言いかけて、使ひは来たり櫛の齒を挽くがごとくと言ひ果てし迄、毛筋よく通りて、詞に纏かの垢も見えず。掘井の足代（井戸掘の歌）より中々調べ高しとて、勝とす。 櫛を齒を挽きてし文に告げやれどさしたる妹が挨拶もなし すぎはひの我が業よりも見はれたる妹をくしとてひける袖かな 桜木は櫛にも挽かでおきながら花はかざしに手折りつるかな なりはひの櫛もこのごろ手につかで妹に心のひかれける哉 櫛挽のひきもきらずに花盛りすきものどちの来てや見るらん 山の端も峯も盛りと櫛挽も花見に今日は引き出されけり 櫛の齒を挽くがごとくに花咲くとつげて嬉しき木曾の山住み 中わろき象牙の櫛を挽きながら虎の尾桜眺め暮さん 片割れはあれかこれかと指さして挽きそわづらふ三日月の櫛 齒並びも揃はず老いて鋸の腰にも弓を張れる櫛挽 「宝船桂帆柱」櫛挽 繁盛は櫛の齒を挽く忙しさこれ正直の頭よりして 「お六にこくしげは挽くによりほどどどりだ」 「齒を挽くやうに齒ひがあるから、めでたい、く」

【本文】

四十二番

大井川なかれにつるゝいかたしの

くれことにみる月のさやけさ

いてやらていとゝこゝろをつくし櫛

はわけの月にやまかせもかな

筏のさして難なけれども、葉分の月に

山風をねかふ、心あり。以右為勝。

やま国やゑせ木のくれはかさなれと

きはらるゝ身はひとりこそおれ

なかれ―【類】流

くれことに―【類】くれ毎に

いてやらて―【類】出やらて こゝろをつくし櫛―【類】心を筑紫櫛

やまかせ―【類】山嵐

やま国―【類】山国

身―【類】み ひとり―【類】独

いかにせむあふ事かたきゆすの木の
われにひかれぬ人のこころを

左右ともに、いとほるゝ恋の心、おなし
かるへし。仍為持。

筏士

此程は水

しほよくて、

いくらの材木を

くたしつらむ。

くしひき

まつ、これはかり

ひきて、のこきりの

めをきらむ。



【語注】

◎筏士は、木材を筏に組んで流し運ぶ職人。筏や筏士は、和歌や連歌にしばしば詠まれる。

櫂挽は、櫂材を鋸で挽いて櫂を作る職人。

両者の関係は未考。

いかにせむ―〔類〕いかにせん あふ事―〔類〕逢こと
われ―〔類〕我 こころ―〔忠〕〔明〕〔類〕心

筏士―〔尊〕ナシ〔忠〕四十一番筏士

此程―〔類〕此ほと

くしひき―〔白〕〔類〕櫂挽〔忠〕くしひき櫂挽

まつ―〔明〕〔類〕先

のこきり―〔白〕のここり〔忠〕のここり

め―〔忠〕目

◎大井川 「大堰川」とも書く。山城国の歌枕。桂川のうち、嵐山の山麓付近の名。上流に山国荘（「やま国や」の項参照）があり、木材を積み出すための筏の通行が多く、「大井川下す筏のみなれ棹みなれぬ人も恋しかりけり（読人不知）」（拾遺集十一、恋一）、「大井川紅葉を渡る筏師は棹に錦をかけてこそ見れ（平致親）」（金葉集四、冬部）などのように、筏や筏師がよく詠まれた（歌枕歌ことば辞典「大堰川」の項）。

◎なかれにつるゝいかたし 「ゝに連る」は、「戸無瀬より浮きて流るる紅葉葉に連れてぞ下る鴛鴦の群鳥（源仲正）」（夫木和歌抄十七、冬部二）のように、和歌にまま用いられる。流れにつれて下る筏師。

◎くれ 「樽」と「暮れ」とを掛ける。「樽」は、建築用の板材で、「筏」の縁語。「樽」と「暮れ」とを掛けるのは、「夕ぐれの流れくるまを待つほどに涙おほいの川とこそなれ」（蜻蛉日記、上）など、歌ではよく用いられる修辞。本歌合第一番左、番匠の恋の歌、「くれ」ことにひとりふし木の……」、筏士の恋の歌、「山国や多せ木のくれはかさなれど……」の「くれ」も同様。

◎いてやらて（月が）さっさと出ないで。下句に「葉分けの月」とあるように、まだ山の端にかかっているのである。

◎いとゝこゝろをつくし櫛 とても気を揉む、の意の「いとど心を尽くし」から「筑紫櫛」と続ける。「筑紫櫛」は、古く九州地方で産した櫛か。『八代集抄』に、「筑紫の櫛にや。薩摩にも有」（拾遺六）とする。数は少ないが、「別れば心をみぞ筑紫櫛さしてあふべき程を知らねば（村上天皇）」（拾遺集六、別）などの用例がある。なお、ここと似た表現に、三十二番針磨の恋の歌、「情なき人に心をつくし針……」があった。

◎はわけの月にやまかせもかな 櫛の縁語「齒」から「葉分けの月」と続ける。「葉分けの月」は、木や草の葉の隙間から見える月。「ささ竹の大宮人は訪ひも来で葉分けの月をひとりこそ見れ（為実）」（新千載集五、秋歌下）などの例がある。月が十分に見えないので、山風が吹いて葉を散らしてほしい、というのである。

◎筏のさして難なれとも 筏の歌はさほど欠点はないけれども。「さして」に筏の縁語「棹を」さす「の」さして「を掛けて、戯れる。

◎心あり 歌論用語。題意に深い理解を示すことを基本的な意味とする。(十番語注「心あるにいたり」の項参照)。
◎やま国や 「山国」は、丹波国桑田郡の山国郷(現京都府北桑田郡京北町)ないし、そこを中心とする皇室領、山国荘。広大な林野から産する木材を、大堰川を下して都に運んだ。「や」は、和歌の初句にしばしば用いられて、場面を提示する詠歎の助詞。

◎ゑせ木のくればかさなれと 「ゑせ木」は、「似非木」で、悪質の木材か。「樽」に「暮れ」を掛ける。「似非木」から、相手が約束を守らない、つまり逢うことのできない暮れが連想される。似非木の樽が重なるように、相手が約束を守らない暮ればかりは度重なるが。

◎きはるゝ身 相手に嫌われる我が身。ただし、この意の「嫌ふ」は、和歌ではほとんど用いられない言葉。

◎あふ事かたきゆすの木の 「逢ふこと難き」から「堅き柞の木」と続ける。「柞の木」は「柞ゆすの木」は「柞いすの木」ともいう。マンサク科の常緑高木で、材は堅く、建材や櫛などの材料となる。「堅き柞の木」で、序詞的に下句に続く。

◎われにひかれぬ人のこゝろを 「ひかれ」に、鋸で挽かれる意の「挽かれ」と、魅惑される意の「引かれ」を掛ける。堅い柞の木が鋸で挽かれないように、私に引かれぬ人の心を。

◎筏士 尊経閣本は職名を落とす。

◎水しほ 「水潮」で、川の水の流れ具合をいうのであろう。後世のものだが、「山だしせし日より、水しほ心にまかせ、ほどなくふる川のあけぼに著木」(吉原一言艶談、一・二二『日本国語大辞典』による)の例がある。

◎のこきりのめをきらむ 「のこきり」は、忠寄本は「のこり」、白石本は、「のこり」とするが、「のこきり(鋸)」が正しかろう。「目を切る」は、目立てをすることであらう。後世の例だが、『浮世床』二・下に、「石白目も切る、桶の箍掛ける」とある。

【絵】

筏士は、笠、蓑、脚絆を着けて筏の上に坐し、左手に棹を持つ。筏には、材木を繋いだ縄や筏の継ぎ目を描く。白

石本、忠寄本は、筏の縄や継ぎ目は描かない。また、棹の描き方を異にする。

櫂挽は、烏帽子を着、諸肌脱ぎで袴を履く。櫂材を弓鋸で挽いているところ。前に、切り取った櫂材三片（類従本は二片）と櫂二個。

【参考】

○ 下す筏も早き川波

棹舟のさしもとどめず過ぎぬるに

〈重貞〉

（紫野千句、一）

○ 浮木とや下す筏の見えつらん

作らぬ橋の残る柚川

〈成阿〉

（同、七）

○ 柚人にこの山道のこと問はん

筏士なれやさしいづみ川

〈日晟〉

（文安月千句、八）

○ 心をとむる秋の花々

筏さへもみぢまじりの大井川

〈宗砌〉

（顯証院会千句、六）

○ はや河にくだる筏士友もなし

雲のおほみぞ入江さびたる

〈吉理〉

（宝徳四年千句、五）

○ 夕まぐれ棹さしくだるひとり舟

待ちてともなへあとの筏士

〈忍誓〉

（享徳千句、三）

○ 泉川筏に誓ふ舟の路

木隠れせばき柚の山あひ

〈心恵〉

（同、五）

○ 枕もつらし目も合はぬ比

真木の板あめる筏の床の上

〈圭承〉

（同、七）

- 筏士の井堰さしこす水馴れ棹
臚舳朽ちたる舟の古川
- ひくや筏の波ぞ随ふ
待つに來ぬ暮れをなづみそ人心
- 筏の上の暮れのさびしさ
末までも水の早瀬の大井川
- 下ろす杣木や筏なるらん
紅葉吹く大井の川の秋の風
- さしのぼる小舟は棹も短きに
下す桴ぞ早く過ぎぬる
- いとなみはこことも大井の山陰に
筏になして小舟さす棹
- 水はやき岸に筏の棹取りて
杣木下しつ殿つくりせり
- 水底の橋にのぞめばかげ寒し
筏に越ゆる越川の音
- 岩だたむ瀬々の筏士過ぎやらで
雨待つころは水も浅川
- 山の嵐も聞く人や聞く
筏さす川瀬みなぎる花もおし

〈寛阿〉
 〈心敬〉
 〈幸綱〉
 〈常安〉
 〈道真〉
 〈正頼〉
 〈宗碩〉

(異体千句、四)
 (同、九)
 (因幡千句、六)
 (熊野千句、二)
 (同、四)
 (同、八)
 (河越千句、四)
 (名所千句、六)
 (東山千句、四)
 (伊庭千句、五)

○降り曇る、空は小倉の峯の雪、空は小倉の峯の雪、散るや嵯峨野の嵐山、滝の響きも声添へて、重なる雲の大井河、
後の床のうき枕、かたしく袖も白妙の、空も程なく廻る日の、西山本に着きにけり、西山本に着きにけり。

(謡曲、車僧)